

子育て支援施設における 有機園芸の実践とその効果

—「親子有機野菜づくり教室」が持つ可能性—

澤登 早苗(人間環境学科)

1. はじめに

2003年、港区・南青山に新しいタイプの子育て支援施設が開設されるのに伴い、筆者はそこで「親子で有機野菜をつくって、食べよう」という新しい試みを実践する機会を得た。同年3月、子育て支援施設の園庭に有機菜園用の区画(以下「キッズ交流ガーデン」と呼ぶ)を造成し、翌4月から未就学児とその家族を対象に有機野菜づくり教室を開催している。幼稚園や保育所でも学童農園を持ったり、農業体験をさせたりするところは増えていくが、子育て支援施設でこのような取り組みを行っているところは、依然としてほとんど例がないようである。

このキッズ交流ガーデンにおける「有機園芸」の実践は「ユニークな子育て支援プログラム」として紹介されている(大日向2005)が、筆者自身も予備的な研究を行い、既にその一部を公表している(澤登2004)。事業開始2年目に行った予備的な研究では、子育て支援施設におけるこの取り組みが「食育」のみならず、「人間形成」や「子育て」に関わる問題解決・支援プログラムとしても大きな可能性を有していることが示唆された。

本稿では事業開始後3年を経たこの取り組みが「親子有機野菜づくり教室」の参加者、「あい・ぽーと」の利用者(子どもと親・家族)及びそこで働く人々にどのような影響を及ぼしているのか考察し、子育て支援施設にお

ける有機園芸プログラムがもつ可能性について検討する。

2. 「キッズ交流ガーデン」と「親子有機野菜づくり教室」の概要

「キッズ交流ガーデン」は東京都港区南青山にある子育て支援施設「あい・ぽーと」(旧青葉幼稚園)の敷地内にあり、2003年の開設当初は「港区民交流ガーデン事業」の一環と位置付けられていた。そのためここで開催される「親子有機野菜づくり教室」などの事業は、施設保有者である港区、「あい・ぽーと」の運営組織、並びに恵泉女学園大学(「あい・ぽーと」の大日向雅美施設長と有機菜園の管理・指導を行っている筆者との両者が勤務)が覚書を交わし、協働運営されてきた。

しかし、2005年からキッズ交流ガーデンにおける事業は、港区管理下の「港区民交流ガーデン事業」としてではなく、子育て支援施設「あい・ぽーと」が恵泉女学園大学の全面的な支援を受けておこなう独自事業となった。このように事業主体が港区から子育て支援施設「あい・ぽーと」へ移行された理由のひとつは、「親子有機野菜づくり教室」の独創性(未就学児とその家族を対象としたものであり子育て支援としても波及効果が認められる点など)が認められ、これを子育て支援事業として扱っても問題ないと判断されたことにあるようだ。

2003年3月、キッズ交流ガーデンを開設するに当たり、これまであった花壇(17.8㎡)に加え、菜園用区画を2箇所(18.9㎡、約9㎡)造成した。2005年9月にはこれらに加え菜園用区画1箇所(16.2㎡)を造成した。菜園の造成に際しては、地表面から30cm以上掘り込み、暗渠排水をとり、黒土で客土をして最低30cmの耕土が確保できるようにした。

2003年4月、港区報を通して、キッズ交流ガーデン「親子有機野菜づくり教室」1期生(ジャガイモコース)を募集し、それ以降2005年度末までに



写真1 開設後最初の植え付け、ジャガイモ(2003年4月)

表1 キッズ交流ガーデン「親子有機野菜づくり教室」開催概要(2003年度-2005年度)

		2003年度	2004年度-2005年
1区画の大きさ		0.42㎡(0.6m×0.7m)	0.6㎡(0.6m×1m)
使用肥料		牛糞堆肥 米ぬか、発酵鶏糞	
使用道具		移植ゴテ、ハサミ、バケツ	
募集人員		15組/コース	
栽培作物 開催日 (月/日)	1期生	ジャガイモ 4/19、5/17、6/21、7/5	ジャガイモ(スイートバジル) 4/17・16、5/15・14、6/19・ 18、7/3・9
	2期生	サトイモ 5/17、6/21、9/6、10/4	サトイモ(落花生)5/15・14、 7/3・9、9/4・3、10/9・15
	3期生	ダイコン・ハクサイ 10/4、10/25、(11/28)12/13、 1/10	ダイコン・ハクサイ10/9・9/3 、10/23・15、11/20・26、 1/8・7
	4期生	ハウレンソウ(サニーレタス・ チンゲンサイ・ラデッシュ・ コカブ) 10/25、(11/28)12/13、1/10、 1/31	ハウレンソウ+コカブ・チン ゲンサイ・サニーレタス・ラ デッシュ・サンチェ 10/23・22、11/20・26、1/8・7、 1/22・28

注1: 2003年は11月28日が雨天だったために12月13日に延期された。

注2: 2004-2005年度の開催日4/7・16は、2004年度が4月7日、2005年度が4月16日を意味する、他も同様である。

12コースを開催している(表1)。1コースは、4回シリーズとし、募集定員は15組、対象は未就学児とその家族、参加費は1家族1コース3,000円で、開催日は土曜日、開催頻度はほぼ1ヶ月に1回、8月と2-3月は原則、休みとしている。各コースとも、初回は播種・植えつけ、最終回は収穫・試食とし、その間の2回は栽培管理という組み合わせにしている。これ以外にも、共通ガーデン区画で栽培している野菜やハーブ類の観察・収穫・試食を適宜、組み込んでいる。1回のプログラムは1時間~1時間半程度で、基本的に次のような流れとなっている:

- ①集合、その日の主な作業についての簡単な説明
- ②自分の畑に関する作業の実施

③その日に畑で見られるもの、収穫できるもの、食べられるものを、みんなで見たり、触ったり、収穫する

④収穫物の試食とお茶を飲んでゆったりしながら歓談する

なお、農作業後のお茶の時間も本プログラムでは、重要な要素のひとつと位置づけ毎回、有機番茶を用意している。

栽培プログラムは恵泉女学園大学の必修授業「生活園芸Ⅰ」で用いている有機園芸プログラムを基本とし、栽培品目は日常的な管理をあまり必要としないもの、4回程度参加者たちが管理に関わるだけで収穫可能なものを選択している。参加家族別の区画に対しては、特別な場合を除き、スタッフ側が日常的な管理(除草など)を行なうことはなく、参加家族に自分の畑であることを実感してもらうとともに責任を持って管理することを求めている。この他、筆者らが管理する共通ガーデン区画(表2)を設け、多種多様な野菜・ハーブ類を栽培し、同教室の中で利用したり、「あい・ぽーと」の利用者やスタッフが日常的に観察、収穫・試食できるようにしている。

1家族あたりの区画の大きさは、家族単位でそれも小さな子供と一緒に管理することを考慮して、初年度は2003年度は大学の区画の約2分の1

表2 共通ガーデン区画における栽培品目一覧(2003年度及び2005年度)

	2003年度	2005年度
野菜	ジャガイモ、ラデッシュ、きゅうり、ミニトマト、ナス、ピーマン、オクラ、落花生、サニーレタス、サンチュ、キャベツ、ブロッコリー、カリフラワー、コモチカンラン、ハクサイ、ダイコン、トウモロコシ、インゲン、ショウガ、エダマメ	ジャガイモ、ラデッシュ、きゅうり、ミニトマト、サニーレタス、ナス、落花生、カボチャ、サンチュ、キャベツ、インゲン、エダマメ、ブロッコリー、カリフラワー、ダイコン、ハクサイ、チンゲンサイ、小松菜、水菜、ゴボウ、スナックエンドウ、ホウレンソウ、ニンジン
ハーブ類	ミント、ゼラニウム、オレガノ、イタリアンパセリ、ワイルドストロベリー、カモミール、ベルガモット、レモンバーム、スイートバジル、ラベンダー、ローズマリー、ナスタチウム	ミント、ゼラニウム、オレガノ、イタリアンパセリ、ワイルドストロベリー、カモミール、ベルガモット、レモンバーム、スイートバジル、ラベンダー、ローズマリー、タイム、ナスタチウム

の0.6m×0.7mとしたが、参加者から狭すぎるという声が多かったため、2004年以降は大学の区画の3分の2、すなわち0.6mx1.0mとした。種苗は本学で購入あるいは育苗した物を持ち込み、肥料も同種の有機質肥料を使用している。プログラムの企画・指導は筆者が行い、教室開催時には本学の学生が毎回、複数名、補助指導に当たっている。なお、2004年度からは、本学人間社会学部人間環境学科の専門科目「園芸と人間形成」の学びの場としても活用しており、履修生が、交代で見学及び補助指導員として当教室に参加している。



写真2 最初の収穫：ジャガイモ
(2003年7月)



写真3 2年目の春：サトイモの植え付け
(2004年5月)



写真4 3年目の夏：こんな虫がいたよ
(2005年7月)



写真5 3年目の冬：こんなに大きな大根がとれたよ
(2006年1月)

3. 「恵泉式有機園芸プログラム」の有効性とその汎用性

学園創設以来、教育の3本柱のひとつとして園芸が位置づけられている恵泉女学園では、大学も設立当初から全学対象の必修実習科目「生活園芸Ⅰ」を置き、1年次の学生が1年間教育農場で野菜や花の栽培を行う本科目を履修することになっている。筆者らはこの教育農場で、1994年以降有機農業を実践し、有機農業を取り入れた独自の園芸教育プログラムを開発・実践してきた。「恵泉式有機園芸プログラム」と呼ぶこともできる本プログラムの実践、蓄積の中で、履修生のレポートや学生との話を通して、有機園芸が教育プログラムとして大きな可能性を秘めていること明らかになった。その最大の理由は、有機農業が①共生 - 多様な生き物、多様な価値観を認める、②循環 - いのちのつながりと物質の循環を大切にする、③生物多様性 - 生物相豊かな耕地生態系をつくり、維持していく、ことを大切にしている農業であり、そこには人を豊かにしていく力=教育力が備わっているからである。

キッズ交流ガーデンにおける「親子有機野菜づくり教室」は「恵泉式有機園芸プログラム」を用いて実践しているものであるが、このプログラムは2004年夏に実施した予備研究において以下のことが確認されたことから、教育プログラムとしての有効性のみならず汎用性も高いこと明らかになった。

- ①対象年齢を選ばない：対象者が大学生であっても、未就学児とその家族であっても実践可能であり、大きな教育効果が期待できる。
- ②狭い場所でも実践可能：園庭や校庭の一区画など、狭い面積しか確保できないところでも実践可能であり、大きな教育効果が期待できる。
- ③多面的な教育効果が期待できる：「食育」のみならず「本物を見る目、現実を直視しそれを受け入れること」や「人間関係を育む」といった面でも効果が期待できる。
- ④多様な生き物の棲みか(サンクチャリー)と子どもが自然と触れる場の提供：食べ物をつくるだけの空間ではなく、土や虫など多種多様な生き物が生きることができ、子どもたちがそれらと安心して戯れることができる場も提供できる

4. 「親子有機野菜づくり教室」の参加者の属性と反応

キッズ交流ガーデンの「親子有機野菜づくり教室」は、毎回、短時間で募集定員に達している。この状況は、本プログラムの開始当初から変わらないが、年々、参加希望者が増加する傾向にある。特に、最近では参加経験者が再度応募するケースも少なくないことから、2005年秋の募集からは、同一作物についてはリピーターを認めないというルールを適用し、新規申込者が優先的に参加できるようにしている。

1) 参加者の属性

表3 親子有機野菜づくり教室の参加家族の属性(2005年度)

① 参加者構成 (件/アンケート回収総数)

コース		子どもの人数/組			合計
		1人	2人	3人	
母親+子ども	①ジャガイモ	2/14	2/14	1/14	5/14
	②サトイモ	3/6			3/6
	③大根・白菜	2/8			2/8
	④冬野菜いろいろ	4/12	2/12		6/12
父・母親+子ども	①ジャガイモ	4/14	5/14		9/14
	②サトイモ	3/6			3/6
	③大根・白菜	2/8	3/8	1/8	6/8
	④冬野菜いろいろ	4/12	2/12		6/12

注：主たる参加者を対象として集計。部分的に祖母及び祖父が参加した家族もあった

②参加した子どもの年齢

プログラム	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳<	合計	家族数
①ジャガイモ	1	5	2	3	6	2	3	22	14
②サトイモ	0	1	0	4	1	0	0	6	6
③大根・白菜	0	1	1	4	3	2	2	13	8
④冬野菜いろいろ	0	3	2	6	2	2	1	16	12

注：①②とも終了時アンケート(2005年7月、10月、2006年1月実施)より作成

コース終了時に実施しているアンケート結果から2005年度開催コースの参加者構成を見ると(表3)、両親と子供で参加している場合が最も多く、いずれのコースでも過半数を占めていた。1組当たりの子供の参

加人数は1人が多い傾向が見られたが、3人という場合もあった。参加した子供の年齢は0～8歳で中心は3歳～4歳、0～1歳児は兄及び姉との参加が多かった。参加した親の年齢は30代が圧倒的に多く、次いで40代、20代は非常に少なかった。2003年～2004年前半の時点では、20代の親の参加者は皆無であり、0～1歳児は全て兄及び姉との参加であったことを考えると、徐々に参加家族の親の年齢層及び子どもの年齢幅が広がっていると推測される。

2) 一番楽しかったこと、うれしかったこと、よかったこと

終了時アンケートには「一番楽しかったこと、うれしかったこと、よかったことはなんですか」という設問を設けてある。そこに書かれた参加者の声の一例を表4に示したが、これらは大きく次の6つにまとめることができよう。

- ①収穫の喜び、自分で育てて食べること、収穫したてのものを食べることに對する喜び
- ②土に触れ、野菜が育つ姿を自分の目で確かめたことに對する喜び
- ③身近な食べものが意外な姿で育っていることに對する驚き
- ④親子で野菜づくりをして、一緒に楽しんだことに對する喜び
- ⑤普段食べない野菜を子どもが食べたことに對する驚き
- ⑥子どもが土と戯れ、虫に触れるようになったことに對する安堵感

このうち①～⑤までは、「食べる意欲を高める」、「食べものへの関心を高める」、「家族で楽しむ」ことにつながるもので全て「食育」支援において基本的な要素を成すものである。⑥は、キッズ交流ガーデンが、大都市の真中で子どもが自然と触れ合う場、子どもが自然に出会う場となっていること、すなわち子どもと遊びといった側面でも重要な役割を担っていることを示しているものである。

個々のアンケートからは「畑を子供とつくるのが夢であった・・・」、「港区の住宅では、特に自宅(マンション)で、このような植物を育てることは難しい・・・」、「スーパーなどで野菜は買うだけのものと感じて

表4 キッズ交流ガーデンに参加して「一番楽しかったこと、うれしかったこと、よかったこと」

①「サトイモコース」(2003年)終了時アンケートより

・土に触れる機会が少ないので楽しめた。虫をいっぱい発見できたこと。
・収穫時、親も子も大喜びでした。植え付けのとき子供は何をしているのかわからないようでしたが、収穫して初めて意義、目的を知ったようです。
・土に触れて実際に野菜が作れ、途中何度か成長過程も見ることができ、栽培していない野菜も食べさせて頂いた。
・サトイモの葉がこんなに大きくなるとは知りませんでした。遠くに出かけるのではなく、近くの畑で自分の植えたものが収穫できるのはうれしいことです。
・子供の喜ぶ顔が見れてよかったです。
・サトイモ以外にも様々な野菜が育つことを体験でき、子供だけではなく、大人も楽しめてよかったです。
・日ごろ、土に触れる機会もなく育ってきた親世代でも良い経験になりました。親が子供に伝えることのできないことを代わりに教えていただき、とてもよかったです。先生のお話もわかりやすくてのしかかったです。

②「ジャガイモ」・「ホウレンソウ・冬野菜いろいろ」コース(2004年)終了時アンケートより

・畑を子供とつくるのは夢であったので、とても嬉しかった。
・スーパーなどで野菜は買うだけのものと感じていた子供たちが、野菜づくりを体験することで、実がなるまでの苦労などを知り、食べ物の大切さを実感してもらえてよかったです。子供たちにとってとてもよい経験となりました。
・収穫。きゅうり、ラデッシュなど、とりたてのものを食べたこと。
・子供に作物のできる過程を見せることができた。子供も楽しんでた。また、参加したいと思う。
・おいも掘ったことが楽しかった(子供) 食べられたことが楽しかった(親)。
・収穫。たくさんとれました。家に帰って食べるのが楽しみです。
・幼虫の発見、お引越し。土に触れる。自分でつくったものを実際食べることもできたこと。
・土をたがやしたこと、タネイモをうえたこと。ジャガイモはだめだったけど、トマトやイチゴ、レタスを植えてもらってとてもうれしかった。先生や学生さんたちが優しく教えてくれたこと。
・収穫。カブがどっさりとれました。というよりとり放題で楽しかったです
・カブを抜いたこと、大きなカブほどではありませんでしたが、すごく面白かったです。
・植えたものがちゃんと収穫できて、おいしく食べられたこと。
・収穫。行くたびに大きくなる作物に毎回感動していました。また、ぜひ参加したい。
・子どもが楽しそうに参加していたことがうれしかった。子どもと一緒に野菜を育てることが楽しかった。
・毎回、レタスやラデッシュを取れるので、あい・ぽーとの日だよという、「やったー、行く」とごきげんでした。
・今まで(3回)の中で最高の収穫量でした。年々、畑がよくなっている気がします。

③「ダイコン・ハクサイ」・「ホウレンソウ、冬野菜いろいろ」コース (2005年) 終了時アンケートより

・子どもに収穫の喜びを味あわせることができたこと。
・子どもが野菜に興味をもち葉の育ち方や種類を覚えたこと。町中の畑を見ても野菜の名前を言える様になりました。
・大きいダイコンがとれて子どもは喜んでいました。ハクサイをみせたかったです。
・都会ではなかなかできない体験ができてよかったです。「ダイコンが抜けて楽しかった」と子どもも喜んでいました。
・有機野菜が家の近くでこんな立派につくれること、実際自分の手でつくれること。
・子どもがハクサイをたべるようになった。大きなダイコンがとれたこと。
・収穫の喜びを知ることができる。手入れをし、手をかけることの大切さを知る。成長の様子を知ることができる。
・おいしい野菜がとれて、本人も畑で野菜をつくれてうれしそうでした。
・娘が土いじりをとても張り切って行っていたことが嬉しかったです。少し、食べものを大事にするようになりました。
・たくさん収穫できた。子どもが野菜をおいしく食べていた。
・子どもが野菜作りに参加できたこと。学生さんたちが積極的に教えて下さって楽しかった(子どもがよろこんでいた)。
・収穫、野菜が好きになり、食べるようになりました。
・こどもが今まで温野菜しか口にしなかったが、とれたての野菜を口にしたのでびっくりした。
・種子を播いて芽が出てきたこと。
・種子播きから収穫、成長を見ることができたのがよかった。収穫物を家で食べる楽しみもありました。
・スーパーの野菜と自分で収穫する野菜とはやはり味が違うので、パクパク食べるのでうれしいです。
・自分で植えた種子が育ち、食べられることはうれしい、楽しいということが2歳の娘でもわかるようです。
・野菜は元来よく食べる子ですが、ますます好きになったようです。
・子どもが今まで以上に野菜が好きになりました。野菜を生で食べると火を通す以上おいしいです。
・種子からカブ、ホウレンソウ、チンゲンサイが採れた。甘かったのでびっくり、子どもも食べてくれた。

いた子供たちが・・・」、「土に触れることなく育ってきた親世代でもよい経験となりました。」といった記述が見られ、そこからは、東京の都心で暮らしている人々の生活スタイルが伝わってくる。特に2005年度のアンケートでは「思いのほかたくさん収穫できた」、「(野菜)が甘かったのでびっくり」、「大きな大根」といった、最初の頃にはみられなかった収穫物の量や大きさ、食味に関する記述も見られた。このことは、土が育ち、収穫量が増してきていることを表している。

「畑で野菜をつくること」、「畑から野菜をとってきて食べること」、これはごく最近まで多くの日本人が普通に行っていた生活であり、農村部に住んでいなくとも、誰しも一度は経験したことがあった。しかし、今、都市住民にとっては遠くに出かけて行かなければ経験できない特別なものとなってしまっている。このことは、アンケート中の「遠くに出かけるのではなく、近くの畑で自分の植えたものが収穫できるのはうれしいことです」とか、「親が子供に伝えることができないことを代わりに教えていただき、とてもよかったです」という声にも反映されている。また、「子供だけでなく大人もこのプログラムを楽しむことができた」という参加者の声は、本プログラムを通して参加者は、かつては当たり前にあった「自然空間」「農的空間」「農的体験」をキッズ交流ガーデンの場において、享受、実感、体験したことを示していると考えられる。これらのことから、都市部の子育て支援施設において、このような「野菜の栽培教室」を行うことは、「食育」支援プログラムとして、また、子供の自然体験の場として非常に重要であるといえよう。

3) 参加者の満足度と収穫量

有機農業の教育プログラムとしての有効性を評価しながらも、実際の現場では有機栽培に踏み込めずにいる指導者は大勢いると思われる。いずれも、もし、十分に収穫できなかったらどうしよう、収穫物という結果が出なかったらどうしようと考え一歩踏み出せないのではないだろうか。しかし、筆者らは、参加者の満足度は収穫量そのものだけではない

と確信している。これまでの経験から、むしろ収穫量が少なかったときにどのようにフォローするかが重要であり、教育プログラムとしての意義があると考えている。アンケート結果にも見られるように、参加者は、まず自分の手でつくって食べることに大きな喜びを感じている。したがって、参加者が何らかのものを収穫できること、また収穫物をその場で試食することは、プログラム構成上不可欠である。そのため、畑で試食用が十分確保できない場合は、それに類似したものを用意する必要がある。しかし、それを行った上で、収穫量が少なかった時には、なぜそうなったのか一緒に考える。また、自然界においては不作の年もあることや、時には自分ではどうしようもないことを受け入れなければならないことがあることを話して、理解を求める。そのことが教育上大きな意味をもっている。キッズ交流ガーデンも最初の2年間は、決して豊作とはいえない状態であった。しかし、収穫物を手にした子供の顔はいずれも満足感に満ち溢れていた。アンケートには「もう少し収穫できたらよかった」という大人の正直な気持ちも書かれていたが、誰一人収穫量が少なかったことに不平を言う人はいなかった。このことは、参加者の心に大きな感動と満足感を与えるのは、収穫物という単なる結果ではなく、その作物を育てる過程、そのものの中に多く潜んでいることを示唆している。

4) お茶の時間が持つ意義

毎回、終了時にみんなで有機茶を飲んで、ゆったりする時間を持つことを大切にしている。いわば、slow tea timeである。これにより、参加者同士が交流を深め、スタッフ側が参加者と話しをする機会も増えている。たかがお茶の時間と思われがちだが、キッズ交流ガーデンは、単に農作業や農業体験のみを行うことだけを目的とした空間ではない。ここでは、土を耕すことを通して人と人との関係も耕していくこともめざしている。コミュニティーを耕す、これは有機農業の重要な目的のひとつである。大学の畑で学生同士の間にも協調性が育まれているように、ここ

でも子育て過程にある家族の間に新しい関係が築かれている。

5. 子育てと有機園芸

お茶を飲みながら雑談をした参加者の中に、この教室に参加したことで、子育ての悩みが解消したというお母さんがいた。有機園芸では自然に逆らわず、それぞれがもっている特性を生かすことが大切であることをここで実感し、子育てもムリをしないで子供の特性を生かしていこう、自然体で子育てをしていこうと気持ちを切り替えたことで、問題が解決したという。あい・ぽーとの利用者の中にも、この教室に参加するようになってから、周囲とのコミュニケーション力や子どもとの接し方に大きな改善が認められたお母さんがいた。母親が変化するのに従って子どもにも変化が認められ、安定してきた。子育て支援側からこれらの家族を見守っていた「あい・ぽーと」のスタッフは、このような出来事を通じて子育て支援施設で有機園芸を実践していくことに大きな意義を感じ、理解を深めているようだ。「作物を育てることは、まるで自分の子供を育てているようだ」、これは毎年、本学の1年生が生活園芸Ⅰのレポートに書いてくる言葉である。近代化農業のように人間が全てを制御して作物をつくるのではなく、自然の営みを生かしていく有機農業には、子育てに繋がる基本的な考え方や視点が多く含まれている。そのため、有機農業を通して子育てを考えるとわかりやすく、子育てが楽しくなる。このことは、子育て過程にいる筆者も日頃感じている。このように、食育のみならず子育てそのものの支援のために有機園芸を実践していくことの意義は大きい。

6. 「キッズ交流ガーデン事業」の今後の展開

キッズ交流ガーデン事業は開始から3年を経過し、栽培実践プログラムの組み立てという第一段階がほぼ完了し、プログラムの普及・発展のための体制づくりという第二段階に進むべき時期を迎えている。このことは、毎回、募集定員を大幅に上回る参加希望者がいることや、コース修了者からこれらを発展・普及していく仕組みをつくって欲しいという要望が出て

きていることにも現れている。

あい・ぽーとでは、2006年3月から、日常的にキッズ交流ガーデン以外の場所で栽培されている植物の栽培管理を支援してもらうためにグリーンサポーター制度を新たに設けた。それと同時に、「親子有機野菜づくり教室」で実践している「恵泉式有機園芸プログラム」の指導や普及・補助を行なう「有機園芸支援者(仮称)」の養成講座の開催、資格認定制度の設置をめざして検討を始めることにした。有機園芸の実践をあい・ぽーとの中だけでなく、外部に向かって広げていくためである。リピーターの参加家族からは、子どもが通う幼稚園、小学校などで、有機園芸を実践するための講座を開設してもらえないかという声も出てきた。「あい・ぽーと」を運営しているNPO法人「あい・ぽーとステーション」は、子育て支援のパートナーがあい・ぽーとの中だけでなく、地域の中にたくさん増えることをめざして2005年1月から「子育て・家族支援者」養成講座を開催し、資格認定を行なっている。受講対象者は子育て経験のある女性、企業の次世代育成支援の社員研修、定年後の男女など、子どもの有無に関わらず子育て支援に関心と意欲のある人で、認定は3段階、それぞれの段階に応じて子育て支援の活動の場が想定されている。キッズ交流ガーデン事業でも、この支援者養成講座のノウハウを参考に、恵泉女学園大学で開講されている園芸関連の講義や公開講座と組み合わせてカリキュラムを構成していけば、本格的に「有機園芸支援者(仮称)」養成と資格認定を行うことが可能であると思われる。

7. まとめ

2003年から2005年度までの3年間で、キッズ交流ガーデンでは「親子有機野菜づくり教室」が12コース実施され、既に港区に住むのべ500人近い子どもとその家族がジャガイモ、サトイモ、大根、白菜、ハウレンソウ、コカブ、サニーレタスなどの有機栽培を実践し、有機園芸を体験、体感した。2005年9月に菜園区画が拡張されたことにより、毎コース15-18組の家族を受け入れながら、共通区画で多種多様な野菜・ハーブ類を安定的に栽培

してことが可能となり、有機園芸を実践していくためのハード面での体制がほぼ整ったといえる。

一方、本研究からは、有機園芸が「食育」のみならず「子育て支援」にとっても重要な要素となりうることが明らかになった。今後は、子育て支援施設から有機園芸プログラムを発信していくための具体的な方法、例えば有機園芸普及のための支援者養成や資格制度を構築するとともに、子どもの発達と有機園芸の関わりなど、有機園芸が人間形成に及ぼす影響についてさらに研究を深めていきたい。

参考文献

河合雅雄. 子どもと自然. 岩波新書. 1990.

大日向雅美. 「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない. 岩波書店. 2005.

澤登早苗. 教育農場の四季. コモンズ. 2005.

澤登早苗. 子育て支援施設における食育と有機農業. 有機農業研究年報 vol.4: 144-162. 2004.